

1. 秋田県仙北市

- ・視察者 井上聖子、斎藤雅男、鈴木健一、中島慎一郎、藤倉憲、堀越博文、吉田英三郎、米山真澄
- ・視察場所 秋田県仙北市役所
- ・視察日時 平成31年2月7日(木) 午後1時30分から午後3時
- ・視察項目 ドローンを活用したまちづくりについて
- ・対応者 秋田県仙北市議会総務常任委員会 真崎寿浩 委員長
秋田県仙北市総務部地方創生・総合戦略室 藤村幸子 室長
秋田県仙北市議会事務局 三浦清人 局長
秋田県仙北市議会事務局 高階栄子 参事
- ・視察目的 山間の山村集落にも関わらず、近未来技術であるドローンの有効性に関して特区を利用し、実証実験をしており、その取組について東松山市でも活かせるのではないかと考え視察した。

・要旨(報告事項)

仙北市では、ドローンを利用して様々な取組を行っている。ドローンによる図書輸送の実証実験、ドローンインパクトチャレンジ アジアカップ、市民に対するドローンの貸出、災害現場確認、ドローンテクニカルチャレンジ、ドローンフェア、ドローンによる農薬散布、公共施設の屋根の点検、市民向けドローン講習会、マイクロドローン組立て会、仙北市インターナショナルドローンフィルムフェスティバル、地域おこし協力隊のドローン日記などについて紹介をしていただき、主に特区を利用した取組に関する説明を受けた。

・視察結果・所感

山間の市であり広い山林面積を抱え、人口減少、少子高齢化、財政難の中、近未来技術実証特区を活用し、ドローンを有効利用した行政の効率化、町おこしに取り組んでいた。特区の活用についても詳しく教えていただいた。最初は、仙北市から一方的に内閣府にアプローチしていたものが、内閣府から連絡が入り、だんだん現実味を帯びてきたことなど、当時の担当者の苦勞が伺えた。特区についてはチャレンジの価値があると思った。特に、ドローンの飛行区域をはじめとする様々な規制緩和が実現できたという話は、非常に参考になった。

またドローン利用について、図書輸送は現実的に難しい問題があるということであったが、災害現場確認、農薬散布、屋根の点検などについては非常に有効と思われる。東松山市でも災害の際はドローンの映像により火災現場の発見、確認などを行っているが、さらに高度な利用方法を模索し、ドローンを活用する手立てを考えることも必要と考える。

最後に、直面する様々な問題を職員の知恵と努力と、チャレンジ精神で乗り越えようとしていたことに感銘した。決して恵まれた環境ではない。むしろ厳しい自然環境と少子高齢化と財政難の中、特区を利用し、チャレンジしている姿は何よりも勉強になった。

議員の視察に対して、市民やマスコミから、「視察に行かなくてもインターネットで見ればわかるのではないか」といった批判を受けることがある。たしかに、そのような一面があることは否めない。しかしながら、東京から遠く離れたところで努力や工夫をしながら取り組んでいることを、足を運び肌身で感じることは非常に有益だと思う。また、職員の熱意や本音、苦勞話は、ホームページでは見られない。あとはその見たり聞いたり感じたことを、どう活かすかが問題である。すぐに活かさないこともある。行ってみて参考にならないこともある。しかし、それも実際に足を運ばなければわからないことである。

この視察を今後の東松山市の発展に活かせるように、会派内での議論、発表、一般質問等で折に触れ、市に提言していきたいと思う。

2. 宮城県仙台市

- ・視 察 者 井上聖子、斎藤雅男、鈴木健一、中島慎一郎、藤倉憲、堀越博文、吉田英三郎、米山真澄
- ・視察場所 秋田県仙台市 仙台子ども体験プラザ
- ・視察日時 平成31年2月8日(金) 午前10時から午前11時45分
- ・視察項目 仙台子ども体験プラザの取組について
- ・対 応 者 仙台市教育委員会学校教育部教育指導課
学びの連携推進室 春日文隆 室長

- ・視察目的 当市の子どもキャリア教育の参考とするため、仙台子ども体験プラザの取組を視察した。

・要旨(報告事項)

○仙台市の概要

面積：786.30km²

人口：1,088,669人(2018年10月1日)

人口密度：1,385人/km²

世帯数：514,509世帯

○事業内容

小・中学校段階での仙台版キャリア教育「仙台自分づくり教育」の更なる充実と推進を図るため、中東カタール国から、被災地復興支援「カタールフレンド基金」の事業採択を受け、経済教育団体である「公益社団法人ジュニアアチーブメント日本」の教育プログラムを活用し、企業や市民と幅広く連携しながら、学習施設「仙台子ども体験プラザ」において、体験型経済教育プログラム(スチューデントシティファイナンスパーク)を実施している。

(1)小学生を対象とした「スチューデントシティ」

施設の中に、市役所・銀行・商店・新聞社などからなる実際に近い「街」を再現し児童が商品の販売や営業を行ったり、消費者として計画的に物を買ったりする活動を体験するプログラム。

働く側(労働)と買う側(消費)の両方の体験を通して児童が社会の仕組みや経済の動きを理解するとともに、働くことの意義や仕事を通じて支え合っていること学び、児童に望ましい勤労観や職業観を育てる。

(2)中学生を対象にした「ファイナンスパーク」

スチューデントシティと同様に、施設の中に「街」を再現し年齢・家族構成・年収等の与えられた条件の中で、一人の社会人として1か月の生活設計を行うプログラム。税金・保険をはじめ、食費や家賃、光熱水費・物品の購入など、消費者として生活費の計画を行うことを通じて、望ましい金銭感覚や社会にあふれる情報を適切に選択収集し、判断する力、自らの生き方につながる生活設計力を育成しその後の進路選択や将来設計につなげる取組。

協賛企業

- ① アイリスオーヤマ(株)
- ② (株) 葉匠三全
- ③ (株) 河北新報社
- ④ クオール(株)
- ⑤ (株) 七十七銀行

- ⑥ セコム (株)
- ⑦ ゼビオ (株)
- ⑧ NTT東日本
- ⑨ ヤマト運輸 (株)
- ⑩ (株) ローソン

○成果

「スチューデントシティ」

実施人数

- ・平成26年度
5学年 788人 6学年1,992人 合計2,780人
- ・平成27年度
5学年3,380人 6学年5,127人 合計8,507人
- ・平成28年度
5学年3,259人 6学年4,903人 合計8,162人
- ・平成29年度
5学年3,069人 6学年4,900人 合計7,969人

児童の意見

- ・働いてお金を得ることの大変さを知った。
自分の親もこうやってお給料をもらっているのだと思った。感謝したい。
- ・学校が違ったが同じ企業で働いて絆が深まった。
- ・将来働くことが楽しみになった。

教師の意見

- ・人前で児童が堂々と自信をもって話すなど学校とは異なる成長が見られた。
- ・与えられた仕事だけでなく必要な仕事を見つけて声をかけ協力したり、その児童らしさが発揮された。

「ファイナンスパーク」

実施人数

- ・平成26年度
1学年 52人 2学年 603人 3学年 619人 合計1,274人
- ・平成27年度
1学年407人 2学年1,413人 3学年1,695人 合計3,515人
- ・平成28年度
1学年383人 2学年1,929人 3学年5,982人 合計8,294人
- ・平成29年度
1学年306人 2学年1,707人 3学年5,635人 合計7,648人

生徒の意見

- ・親が家計をやりくりしていることを知った。
- ・改めて親のありがたみを感じた。
- ・限られた条件では、全ての希望は叶わない。
- ・優先すべきもの我慢すべきものがある。
- ・将来こうして生活するという実感が持てた。

教師の意見

- ・自分の将来や進路に対する意識の向上。
- ・「何を大事にするか」が大切→自分次第。

- ・将来を語ろうとしない生徒も自分の言葉で。

保護者ボランティア アンケート

問：企業ボランティア等が連携した経済教育プログラムの内容について

- ・大変良い 76.6%
- ・良い 19.0%
- ・まあまあ良い 4.1%
- ・あまりよくない 0.3%

・視察所感

仙台子ども体験プラザを視察して、公民連携事業として多くの企業がこの事業に賛同し参加していることに驚いた。内容についてもそれぞれの企業の社員の方々が現場さながらに子どもたちをしっかりと大人扱い・社員扱いして研修し、仕事をしている環境は、実際の仕事の現場を再現していた。

その環境に身を置き児童生徒が真剣に取り組む姿勢は、通常の教育環境では得ることのできない貴重な体験だと感じた。将来自分がどのような仕事に就き、どのようなライフスタイル・ライフデザインを描くのか、この時期から興味関心を持たせるには有意義な試みだと思う。

体験研修に取り組む児童の真剣な顔が記憶に残っている。仙台市と当市では行政規模なども違うので、仙台の取組をそのまま当市で行うことは難しいかもしれないが、公と民間が連携し、児童生徒に体験型のキャリア教育を行うことは「仕組みづくり」ができれば可能かと思うので、今後研究すべきと考える。